若越郷土研究
47の4・5

越前芦屋釜についての調査研究

池田正男

はじめに

茶の湯の釜として、東の天命（てんみょう）、西の芦屋は双璧とされている。天命釜は栃木県佐野市の佐野庄天命で作られ、生活用品の湯釜を祖形としている。一方、芦屋釜は真形（しんなり）という釜形をあみ出し、福岡県芦屋町あたりの遠賀川河口周辺で作られ、室町期に大内氏のもとで最盛期を迎えたが、大内氏の滅亡と機を一にして衰退し、他の地方に伝播していったとされる。前者を筑前芦屋、後者を脇芦屋あるいは芦屋系と呼ばれている。越前芦屋釜は脇芦屋のトップに挙げられ、当時から芦屋釜に加えられて高い評価を受けていた。越前では芦屋系の流入以前から茶釜を産しており、古来からの釜形（天命系の釜形）と芦屋系の釜形との混合形を特徴としている。また「尻が重くて地金が硬く錆び難いので丈夫で長持ち」との定評であった。そして近代まで鋳物業が継承され、生活必需品の鍋・釜・湯釜を産した。しかしながら古い時代の越前芦屋釜については不明な点が多い。

第1章では越前芦屋釜に関する近世の文献、近現代の研究事例を紹介し、その成果や特徴・問題点・課題などを明らかにしたいと思う。

第2章では前章で明らかになった課題に関する筆者の調査内容を記してみたい。

第1章、越前芦屋釜の研究史

1、近世の文献資料

1―1、西村道冶

京釜師西村家の三代当主であり、釜作の家業を継ぎ、茶釜の研究も行い、いくつかの著作を残している。この時代、釜師が茶釜の目利きとして極め（鑑定書）を書いている。道冶筆の極め書きは釜と共に伝わっているが、数奇品であるため公になっているものは少ない。

名物釜所持名寄は芦屋釜を三十九口、天命釜三十八口、京釜七十一口を挙げ、その名称、作者または産地、特徴、所持者経歴などを伝承や古記などを参考にして列記している。芦屋釜三十九口中に越前作の釜三口を芦屋に含めて記している。就中、油屋釜は堺の油屋浄祐の所蔵に由来する命名であり、松江城主松平不昧公の大名物釜として著名で、『雲州蔵帳図鑑』（白崎秀雄著）や『茶道美術全集　釜』（蔵田蔵著）に取り上げられている。

道冶の著作は多くの伝本があり、現代に至るまで鑑定のバイブルともなっていたようだ。

①名物釜所持名寄（『あしやの釜』長野埈志著より）

・芦屋　（中略）

越前上作　真形釜　地紋麒麟　小出仁左衛門

越前上作　東山殿所持

檜垣釜　鐶付瓶子　地紋檜垣　袋屋宗吉

（中略）

上代作　油屋浄祐所持

油屋釜　古越前　松竹梅こしき口輪違地紋

釣ト鐶モ有　田屋常甫

（後略）

②釜師之由緒（『新撰茶之湯釜図録』香取秀真著より）

一、芦屋　筑前国
　一、上代極上作　　凡五百年
　二、中代同　　四百年
　三、中代　春延ト書　三百年
　末　　百五十年
　釜鋳元祖ハ土御門院建仁年中栂尾明恵上人筑前国芦屋ニテ茶湯釜初而令鋳之。
一、天猫
　一、上代極上作　　四百年
　二、中代　　三百年
　三、中代　　二百年
　末　　百五十年
　天猫ハ坂東冶工上作也是元祖也佐野天明小田原天猫ハ二代目ヨリ有之天猫ト文字有事アリ名ハ天命ト書小堀遠州公御改メ天明ト書古證云天猫ト書事ヨシト依テ吾家ノ證文ニハ右之文字書之。
一、越前
　一、上代　　三百年
　二、中代　　二百年
　末　　百五十年
一、関東作
　東三十三国之冶工皆天猫之末葉也古天猫佐野小田原三作之外ハ下手成ニ依テ坂東作物ヲ関東作トイフ。　（中略）
　此一巻者元祖ヨリ書付有之反古取集ナヲ又若年ヨリ相伝ノ趣書記而已。
　元禄十三庚辰年霜月三日孝知家道冶　（花押）

1―2、大西浄雪

京釜師大西家の十代当主で釜作の家業を継ぎ、更に茶釜の研究も行い釜の著作を残している。また釜の箱極めも多く残している。『新撰茶之湯釜図録』（香取秀真著）や『茶之湯釜全集　越前・伊勢』（長野姪志著）には浄雪極めの越前作の鶴首釜を取り上げている。

また浄雪著の『釜之図八巻』には三千家等に伝わる釜およそ三百口の実寸大の釜形図が記されている。その中に「油屋　芦屋写」とあり、大名物油屋釜のコピーを作っていたと考えられる。浄雪は古名物の模写にも巧みであり、浄雪自身の古希を記念して鶴首釜七十口を作ったとの所伝がある。ちなみに『卜深庵蔵書写　釜形写絵図』では油屋釜と見られる実寸大の釜形図を載せており、一文字羽で生底の釜図となっている。しかし『雲州蔵帳図鑑』や『茶道美術全集　釜』に載せている図版では羽落としで替え底となっている。油屋釜の原形を模写したものであるように思われる。参考までに記しておく。

①釜之図八巻　（『釜の研究』木下桂風著より）
目録
・阿弥陀堂
　大阿弥陀堂　利休好
　中阿弥陀堂　利休好
　小阿弥陀堂　利休好
　小阿弥陀堂　有楽好
　小阿弥陀堂　覚々斎好
　善光寺小阿弥陀堂
　朝顔　御物
　油屋　芦屋写
　アンコ　（中略）
　此八巻之儀者、三千家并名物其外諸流好形物、古来より切形木形所持雖有之正図記無之に付、此度致穿鑿正に相記置者也、及後年本形紛敷節は、此正図を以可為証拠候、聊無疑論候、依て秘書如件。
　天保十四癸卯年霜月日　　行年六十七歳
　　九代目　大西浄雪
　　長喬　花押

なお『釜之図八巻』の目録は木下桂風の『釜の研究』より引用したが、あいうえお順に記載されており時代的に奇異である。あるいは木下が並べ替えをしたものであろうか。

1―3、坂本周斎

『名物釜所持名寄』(西村道冶著)に釜所持者として記載があり、道冶と同時代の茶人である。茶人でありながら、鑑定に関する著作を残している。香取秀真はその著『新撰茶之湯釜図録』の中で「茶人の中で釜に関する事抔をよく書き残しているのはただ『茶道筌蹄』の著者一人あるのみである。『閑事庵宗信自記』の筆者、坂本周斎などは、釜師から聞き伝えたことを少しばかり記述しているのであるが、皮相の観察で到らざる事遠しといい得るのである。」と手厳しい。

一方、長野垤志は『あしやの釜』の中で、西村道冶と大西浄雪の著述を評した後、「以上二者共系統的には何等教えてくれなかったし、一般的著書ともしていなかったことが、遂に曖昧になってしまったのであろう。宗信自記などは要領を得ている。(中略)仲々要点を良く書いていて鑑定の秘訣とも云えるが事実と異なる部分もある。」と評価している。

越前芦屋釜に関しては次のように特徴を記しており、鑑定のポイントをよく伝えている。

①閑事庵宗信自記　(『新撰茶之湯釜図録』より)

釜之部

・芦屋釜

土御門院建仁之頃筑前之国芦屋ニテ、明恵上人始而鋳サシム今ノ芦屋ナリ。紫金ハダ薄ク上作、後ニ東山公御好ニテ土佐光信ニ下絵十二形仰付ラレ、時ノ名人ヲ撰ミ是ヲ鋳ル、松竹梅楓ナド四季サマザマ十二アリ、土佐家ニ控有之由、此頃ノ釜極上作ニテ数多鋳ル、今古芦屋ト云ハ此時代ヲ云。

(中略)

霰サキ平タク丸キハ極上作、ヒラ口ツブレ、口裏ヘギタル如クノ作、極上作ハ内ニ轆轤ノ筋アリ、越前ニハナシ、筑前芦屋ニモ時代若キニハナシ、肌ハ岩肌、縮緬、引肌アリ、絹肌アリ、鋳型砂入ノ土ナレバ肌サマザマニ付ク、尤生釜ナリ、焼釜ハ時代後ナリ、天明モ同ジ。(中略)肌焼付ル事ハ興次郎始テ作ルト云フ(中略)芦屋天明ノ贋物ハ肌ヲコト更ニ付ルモノ故ニ釜ヲ焼ク、生釜ニテハ出来ズ、皮ムキ残リ、口ノ内又環付ニモ残ル、写シハ焼釜ナレバ口モ丸ク肌モヌメリアリ。(中略)

永正ノ頃播州ニテ芦屋ヲ写ス、永禄ノ頃伊勢ニテモ写ス。(中略)

・天明釜

天明ハ佐野、小田原、但佐野二代目頃ヨリ小田原ニテモ鋳ル。函根ヨリ江戸方惣名関東作トイフ。霰ハ先々角トガリ口裏ザラツク、湯口ホリシ口ヨリ霰打コトアリ、ヒキ肌、岩ハダ、絹肌等イロイロアリ、岩肌ハ責紐釜也。東三十三ケ国ノ作皆天明ノ末ナリ、但三十三ケ国所々ノ土ニテ鋳型ヲ作ル、紋堅シ、堅土和ラカ土モアルナレバ肌イロイロニカハル。(中略)

・蓋

蓋ハ紹鴎時代ニアリテハ鉄蓋ナリ、紹鴎始テ石目ノ桔梗ツマミヲ好ム(中略)芦屋天明ハ鉄蓋也、ツマミヲ折リ後サマザマニカワルナリ唐金蓋利休初テ好ミ、ツマミ四ツカナ透キ茄子ト云、古代蓋ハ裏ニ糸目アリ。(中略)

大阪戸田一玄庵主所蔵候故、同所植村以文

堂了清翁ヨリ被贈、時明治十九年初秋日、兵庫県切戸町宇磨谷氏ヨリ被贈借写者也。

1―4、稲垣休叟

表千家の茶人で『茶道筌蹄』を著した。本書の網目はもと湛然先師の録するところであったが、後大阪の人略庵厳なるものがその師黙々庵について各網目の精しい注釈を得て遂にこの一書を成したものである。（『茶道全集15』「茶道筌蹄について」加藤唐九郎著より）

香取秀真はその著『新撰茶之湯釜図録』の中で「茶人の中で釜に関する事抔をよく書き残しているのはただ『茶道筌蹄』の著者一人あるのみであると高く評価している。本編では釜作者と四十八口の釜を挙げて特徴を記している。残念ながら脇芦屋には触れられていないし、越前作の記述はない。参考までに真形釜についての説明文を挙げておく。続編は茶道界での聞き書きであるが、釜の記事は少なく、越前に関する記述は見当たらない。参考までに釜肌の記述を挙げておく。

①茶道筌蹄　巻之三

・釜作者之部

芦屋　筑前　明恵上人始て釜を命ずといふ

天猫　小田原　河内天猫は茶釜師にあらず

河内天猫は文字天明也

関東　天猫の脇作　其外江戸作を一同に関東作といふ。　（中略）

・釜形之辨

真形　シコロ羽かたのつかぬを鶴首真形といふ。

芦屋天猫に多し。其後ハ此写しなり。古作ゆへ好しれず。底に煙返しといふて細き輪あり。　（後略）

②茶道聞書集　乙巻　（茶道筌蹄　続編）

・百十八　釜之肌　（中略）

柚肌　橘柚の如き肌を云

鮫肌　なめらかなるを云

挽肌　轆轤の挽目有を云

ハヂキ肌　あらきはだを云

肌の名猶あるべし　（後略）

1―5、その他

その他の近世の文献を挙げておく。

①万寶全書　巻八

・和漢諸道具見知鈔　炉釜之部

一、芦屋釜　上作　筑前之内

伏見院之御宇弘安比也、紋に松竹梅有其他、地紋品多し。

一、天命　上作　上野之内

関東釜なり伏見院之御宇なり太平記三十巻目に此釜の事委しく載たり鋳形紋乃模様あり或ハなきもあり。　（中略）

一、肥前釜　利休時代

一、越前釜　東山殿時代

一、伊勢津釜　太閤時代

一、石見釜　同

一、播磨釜　芦屋時代より此かたなり、芦屋によく似たり下作。

一、堺釜　寛永之末より在之　（中略）

右和漢道具之一書者万一往往粗存者雖在之。未咸備今也。幸而得見浪花所生綱干氏某世々有所為秘全乃強乞而求之。附会以補闕略全備節目図解而鏤于諸梓者尓也。

于時元禄七甲戌孟春吉辰。

②茶家酔古集（巻1）

鋳冶略系

・芦屋

筑前芦屋地名ナリ応永ノコロ珠光紹鴎ヘカカル松竹梅霰九枚ホノ絵アリ応永ノコロヨリ永正ノ頃マデヲ古芦屋トイフ。芦屋鋳工

ノ末同国博多ニ移居シ鋳ル所ヲ博多釜トイフ。
越前ニテ芦屋ニ甚ヨク似タル釜出タリコレヲ越前芦屋トイフ。
・天明
下野国佐野大田原天明地名ナリ又天猫トモイフ正長ノ頃ヨリ天文ノコロ迄ヲ古天明トイフ。（後略）

③鋳家系（名越昌孝著）（『新撰茶之湯釜図録』より）
・芦屋
弘安ノ頃筑前ノ国芦屋ノ里ニテ初テ釜ヲ鋳ル、其後応永ノ頃館子一官真如良ト云異国人来朝シテ、同所ニ於テ釜ヲ鋳ル至テ上作也、是芦屋釜ノ始也。応永ノ頃ヨリ永正マデヲ古芦屋ト云フ、大永ノ頃ヨリ天正ノ頃マデヲ後芦屋ト云フナリ、芦屋鋳物師ノ末今ハ同国博多ニ移テ釜ヲ鋳ル、博多釜ト云フ。
・天明
弘安ノ頃下野国佐野大田原天明ト云フ所ニテ釜ヲ鋳ル是天明ノ始ナリ（天猫トモ云フ）、正長ノ頃ヨリ天文ノ頃マデヲ古天明ト云、古代ハ雑器多シ、今モ雑器ヲ鋳ル。

④銘器秘録（著者不明）（『新撰茶之湯釜図録』より）
・芦屋
形いろいろあり地紋松竹梅菊桐草花山水生類文字いづれも絵から見事也、惣じて作り薄く地なまず肌とて艶々しく口作り尋常也、大かたは口広く釜の甲短く尤台底は稀也、環付色々あり、但し上作を真の手という、自然には霰あるもあれどもこれは下作なり。
・関東　天明号又天猫
形色々あり無紋多し、自然文字又はすじ抔あり石目あり縮緬肌とて鋳はだ見事なり、惣じて作り厚し、口作り細く厚手成るが多し、環付いろいろあり、自然霰あり興次郎同せんに見事也、薄手にて巣多くかねやはらかなるは煮えよし、尤も台底用ゆ、但し上作を天明といふ、上野下野の惣名也。

⑤雲州松平家御蔵帳（『茶道全集』より）
・宝物之部
油屋肩衝　利休文若狭盆　油屋浄祐　秀吉公家康公土井利勝冬木喜平治　天明三　伏見屋千五百両（位金一万両）　（中略）
・大名物之部　（中略）
芦屋油屋釜　油屋浄祐　京都ヨリ　二百両
（中略）
・中興名物　（中略）
東陽房　興次郎　冬木　寛政　（中略）
・名物並之部
利休小尻張　興次郎　竹忠　百五十両
芦屋真形　松竹梅　京　樋口源左衛門　寛政
伏見屋　銀十缶目
小阿弥院堂　興次郎　竹忠
丸釜　興次郎　京　広沢仁左衛門　寛政
二百両
古天明責紐　竹忠　百両
古天明霰
萬代屋　興次郎　京　谷定　百両
三玄院　興次郎　大徳寺法会院（雪川）
大徳寺
（中略）
・上之部　位銀五十両
安楽庵　浄昧
野溝　芦屋　添幅宗甫文　（位百両）
古天明常張　竹忠　五十両
少庵霰　興次郎作
公用　少庵公用　興次郎
冬木　松平周防守伝来　（位金十枚）
藤右衛門少庵寄附　（位金五十両）

雲龍小常張　興次郎　　切八　五十両
（後略）

1―6、近世の文献資料のまとめ

西村道冶は釜師の自家に伝わる伝承や書付等を整理し、名物釜所持名寄せを著した。この著は後世のバイブル的著作であったようで多くの伝本が存在する。特に当時の名物釜三口を越前芦屋として挙げている。次いで大西浄雪も釜師の家系であり、多くの極めをするとともに自家秘蔵の釜図録を著した。しかし今日、公になっている資料で越前芦屋は鶴首釜1口のみである。坂本周斎は茶人であるが閑事庵宗信自記に釜の極めに関する釜師の諸伝を書き伝えたが、越前芦屋釜の記述は見当らない。

以上、越前芦屋釜文献資料の全てが中央の資料であり、地元の資料は検出できなかった。また当地の釜とを比較検討した気配も見出せなかった。しかしながら前出の文献は越前芦屋釜の特徴を挙げており、近現代の研究の足がかりを供した。特に大名物として不昧公が所持した油屋釜が伝来している意義は大きい。

2、近現代の研究資料

2―1、木下桂風

茶道全般に通じており、特に茶釜の鑑識鑑賞に関して釜師大西浄長（清右衛門）に教えを受け、大西家門外不出の大西浄雪著『釜図録』の開示を受けた。しかし著書の図録には越前芦屋釜の記載は認められないが、「越前芦屋の地紋は浅く、筑前芦屋の地紋は深い」などとあり、他には記載がない事柄が記されている。また大西浄長（清右衛門）は『釜の作行』を書いているが、木下桂風著『釜の研究』とほぼ同文を載せている。さらに加藤義一郎（逸庵）の『釜』も同じような構成である。よって木下・大西は共著の性格のものと考えられ、加藤も仲間内のような関係にあったものと見られ、前記の越前芦屋の特徴は大西家の家伝に拠ったものを得て、共有的に利用しあったものと考えられる。

なお『釜師系譜』には、「越前芦屋　越前国（今立郡）芦屋」と記している。残念ながら典拠を明らかにしていない。

①釜発達史

（『釜の研究』昭和12年刊。ただし（　）は『釜』昭和28年刊より）

・芦屋系統

芦屋には播州芦屋、越前芦屋、筑前芦屋、伊勢芦屋などがある。この中、名物釜を出したのは越前と筑前である（が、ことに筑前芦屋の方に真の名物釜が多い。たまたま伊勢芦屋、播州芦屋と称する釜を見かけることもあるが、名物釜としての見識もなければ品格もない。（中略）芦屋釜の最初の型状は真形である。越前芦屋も筑前芦屋もこの真形が一番古くまた最上級である。（中略）芦屋釜は地紋のあるものが多く無地紋の釜は少ない。）ことに越前芦屋の地紋は浅く、筑前芦屋の地紋は深い。（これは鉄の性質によるであろうし鋳造技術にもよることと考えられる。この意味をもって筑前芦屋の釜を仔細に眺め透かして観ると、地紋がくっきりと浮彫のようにさへ感じられ、時代がついて古くなれば古くなるほど地紋が鮮明に看取される。実に名物釜である品位と貫禄を備え堂々たるものという他はない。この地紋もまた時代によって種々様々に変遷があるが、中古代に至り雪舟、狩野永徳、土佐光信の下絵があるし、少し降って光起とか応挙あたりの下絵と称するものも

折々見受けることがある。さらに芦屋には筑前にも越前にも霰釜がかなり出ている。）

②釜師系譜

（『釜の研究』昭和12年刊。ただし（　）内は『釜』昭和28年刊）

・筑前芦屋　筑前国（遠賀郡）芦屋

其起源不詳。

土御門帝ノ建仁年間ニ明恵上人ガ釜ヲ鋳セラレタリト云フ、後宇多帝ノ弘安年間ヨリ始メラレタトモ云フ、其ノ名ノ高クナリシハ東山時代也。

大江貞房　正平年間

（中略）

・播州芦屋　播磨国（姫路郡）芦屋

播州ニテ作リ筑前芦屋ニヨク似タリ、時代モ筑前芦屋ト同様ナリト云フ。

（芥田五郎左衛門　不詳）

（代々姫路ニテ鋳物ヲ業トセル旧家ナリ。）

・越前芦屋　越前国（今立郡）芦屋

越前ニテ作リ筑前芦屋ニヨク似タリ、東山時代ヨリ始マレリト云フ。

（松村次右衛門　不詳）

（今立郡五分一村ニテ代々鋳物ヲ業トセル旧家アリ。）

・伊勢芦屋　伊勢国（阿濃）津

伊勢国（阿濃）津ニテ作リ芦屋ニ似テ地紋多シ、織田（豊）時代ヨリ始マレリト云フ。

（辻越後　阿ノ津ニテ鋳物ヲ業トセリ。）

（辻但馬　同上）

・天命釜　下野国佐野（天命宿）

下野国佐野天命ニテ作リシト云フ、起源不詳。弘安年間トモ云フ、芦屋ヨリモ古キト云フ、元和慶長年間最モ盛ンヲ極メシト云フ。

（後略）

2―2、香取秀真

鋳金家であるが、金工全般の見識を買われ東京美術学校の講師の委嘱を受けたのを機に金工の古作鑑定や古記の研究を深め、金工の第一人者と目された。とりわけ大正三年に『茶之湯釜図録』、昭和八年に『新撰茶之湯釜図録』、昭和五年に『新撰釜師系譜』を著し、本格的な茶釜の研究をした草分けともいえる。

しかし越前芦屋釜に関しては近世の著作を引用するのみで自らの知見は述べていない。また図録には越前芦屋釜として二口をあげている。一口は国立博物館所蔵の八角霰釜であるが、香取以外は芦屋釜としている。後一口は香取所蔵の鶴首羽釜を大西浄雪極めの越前芦屋釜として挙げている。これについて長野垤志は「釜師の伝承によると鶴首真形（肩の玉縁がなく、首の長い真形釜）越前釜となっているが、越前作と思われる鶴首真形釜は未見である。」（昭和32年『あしやの釜』の著作時には『新撰茶之湯釜図録』の内容は熟知しているはずである。）とし、別の釜を大西浄雪極めの鶴首釜として挙げている。（昭和48年『茶の湯釜全集』）

よって越前芦屋釜の比定に関して香取説は是認されてはいないようだ。

2―3、長野垤志

鋳金家として名を成し、中年になって茶釜の研究を始め昭和二十八年に『あしやの釜』、昭和二十九年に『天命の釜』を著した。また茶釜の製作に転じ人間国宝の指定を受けた。とりわけ越前芦屋釜研究のため地元の釜師故戸田忠・郷土史家故斉藤槻堂の手引きで当地を踏査し、昭和三十一年に『あしや系の釜』を著し、越前芦屋釜を五分市系と南条鋳物師系に分けて当図録に二十四口を載せている。実にその著の三分の一を越前芦屋釜にあてている。その後、昭和四十八年に『茶の湯釜全

集全十巻』を著し、第3巻『越前・伊勢』を発刊した。それには三十一口の内二十六口の越前芦屋釜を新規に載せている。また後述する森田藤則の論文『越前釜―序説越前国鋳物師考』をここに転載している。

なお森田資料によれば、この頃より森田藤則が地元で発見した釜の情報を提供し、『全集　越前・伊勢』に数口掲載されている。因みに同資料によれば全集を纏めるに当り、全国各地の著名な釜収集家（森田藤則を含む）を精力的に訪ね歩き、各地の釜を比較検討し、その著作に載せているようである。

長野は古文献を収集し研究を深め、自らの釜作を通じて得られた知見により、独自の鑑定眼を育んでいった。しかし晩年には細見良（古香庵）と対立し、主として芦屋釜「茶の十徳釜」を編年の基準に据えたことへの批判を受けた。

元文化庁の保坂三郎や福岡県芦屋町の芦屋釜博物館も長野説には否定的である。

しかしながら越前芦屋釜の研究は長野の他には後述する地元の森田藤則を除いて確認できない。地元に残る越前釜と中央の越前作の釜との比較研究を行い、越前釜の基礎的研究に大きな成果を挙げている。長野の著作を整理する

S28・05　あしやの釜　あ　引用文献略号
S29・11　天命の釜　天
S32・11　あしや系の釜　系
S41・09　茶之湯の釜　茶
S45・06　茶の湯名釜図録　名
S48・09　茶の湯釜全集　全
S50・09　茶の湯釜名品図録　品

室町桃山期を中心に

次に越前芦屋釜に関する知見を抄出してみる。

・材質　引用文献 あ

天命系の釜が分厚なものが多いのは地金が甚だ硬く鋳鋼系とでも云うか、湯走り悪き為に外ならないと考えられる。筑前の地金に特異性があり冶金術不備の点からか、結晶性雑金属の混入の結果、それら雑金属が表面に浮かび、右の如き（筑前系の錆肌は先ず結晶形をなして腐食し、次に薄くはがれるようになってくる。決して一度に深く腐食することは無い。）腐食を呈するのではないかと考えられる。現今でも銑鉄にニュームの少量を混入すると湯走り甚だよろしく鬆立ちを見ない。筑前系釜にたいした鬆立ちを見ないのはこれ又ニュームとか亜鉛、錫の結晶形金属の混在していることを裏書するものではないであろうか。これに引き替え越前あしや釜に鬆立ちが多いのは結晶性金属を含有せず、炭素の含有多き高度の鋳鋼なるが故に、湯走り悪く分厚となり鋳詰り強く、鬆立ちが多くなった証拠とも言えるのである。

・材質　系

鋳鋼の性質を考えて越前釜を見ると羽上羽下に多くの鬆立ちがあり、羽なき釜は火底に近くなる程鬆立ちが多いのは、薄い口辺より順次凝固し肉厚の地金を引寄せるからである。真形釜にては羽上より羽下に鬆立ちがより多いのは、下になるほど釜が厚いから、凝固に際し鋳羽へより多く地金を引き寄せられるからである。かくの如き結果は鋳鋼の鋳物に多い難点であり、鋳鋼の鋳造をなす者の悩みである。即ちこの鬆立ちの出来ている点にて越前釜の地金が鋳鋼に近いのではないかと考えられるのである。又、越前鍛冶が現在の武生の地であり、越前刀の込みの錆色が越前

釜に似ているのは一面同系統の材質であることを物語るものである。伊勢芦屋と関の刀と同じ系統と推定せられる点と同一状態と考えられるのである。

・腐食　系

現在見る越前釜の腐食は自然の腐れ膚である。腐れ方は筑前芦屋釜の如く薄く一皮づつ上はがれしてゆくものではなく、どちらかといえば天命風に近い腐れかたである。しかし地金が甚だ堅いから表面が一様に錆色を見せている物が多く、凹く腐食しているものは少ない。錆色は一種の特徴を示しており、地色は普通の鉄錆の如く赤色（紅柄色に近い）になるが、その上面に粉ぶいたような薄白い錆色が出ているのである。これは何か鉄の中に含有せられた他金属の腐食したものが、浮き上がって来たものと思われる。筑前釜の紫紺に近い黒味、天命釜の葡萄色と異なる点である。生ぶ釜にてはこの粉ぶいたような錆色が越前釜の腐食の特徴である。敦賀系かと思われる釜には薄黒い地肌のものを見るが、近江系砂鉄の混入か、近江砂鉄によったものか明らかにし得ないのである。

・膚　系

越前作は絵模様を入れるために膚に腐食の面白味を見せる天命風の膚あらしはない。しかし筑前釜の如く美しい絹膚ではなく挽目の見えるやや荒い挽膚である。これは型作りに際し膚土砂入りの多いことを物語るものである。それは越前釜の地金がのたれが悪く溶解して型入れの場合、絹膚の如く細かな土を使用すると鋳型の瓦斯が抜け切らず湯流れを妨げるから、鋳上がりが悪くなるのである。それを防ぐために砂を多く混入したと思われるから、筑前の如く美しい膚にならなかったと思われるのである。しかしそれがため挽目のある荒肌となり雅味掬すべきものがある。また図様の表現は最初筑前風の手法であったが、膚味と不調和のためか後には笹篦を多く用いないで写生風の肉付けを多く使ったり強く判に押出す手法を用うるに至ったかと思われるのである。よって古い越前釜に笹篦を薄く使用している釜作が少ないのはこのような挽目の見える荒い地膚には好果を持たないから、勢い肉高の写生風の文様を表現するに至ったとも云えるのである。

・鉄の産地　茶

昔の製鉄冶金法では各産鉄地により溶解度や湯の流れに癖があり、地金の質と錆色に各釜作地間に差が出てきている。越前芦屋釜は地金が一番堅く高度の鋳鋼ともいえる。そのため羽の際や湯口際から火底には鬆立ちが見える。錆色は全体に薄紅柄色に黄色を混えたような色になり、その面が薄く粉ぶいたようになり、腐食の強いところはやや黒ずんで見える。

・中型　系

釜を鋳る時の内側の土型のことを中型という。中型の如きは何等釜の鑑賞や鑑定に関係がないようであるが、使用された鉄の性質によって各釜作地の手法を異にしているから、あながち簡単に片付けてしまうわけにはゆかない。越前釜にては中型の手法は天命や伊勢等と同様専ら削り中型の手法を用いている。五分市作と考えられる霰真形釜の断面は口の厚みが甚だ薄く次第に厚みが増しており、鍔羽下は尚一層厚みが増しているが、火底よりやや上にて替底にしているから以下不明である。しかし順次厚くなっていると考えられ

る。別の平蜘蛛釜は輪口に厚みを見せてはいるが、肩は薄く次第に厚さを増している。しかも両者とも中型の砂は荒く削り方は凸凹が多い。これが地元鋳師の作と考えられる釜の中型の削り方の特徴である。しからば何故このような厚みの一定しない削り方をしたのであろうか。恐らく溶解した地金の性質が鋳鋼に近いもので、湯の流れが悪く出来るだけ高温に溶解した湯を一度に多く流し込み湯の重量にて鋳上げる方法をとったため、底に至る程中型を強く削った結果であると思われる。輪口に手をかけて持ち上げてみると甚だ持ち重りがする。又、外型も鋳造上鋳型に砂入りが多いと認められるから、中型はより一層瓦斯抜けを良くする為多くの荒い砂を混入したものであろう。故に中型を削る場合篦が荒砂に邪魔されて削りが旨く出来ず、凸凹の甚だしい中型になったと思われる。

・五分市作と南条鋳物師作　茶

「越前作には二系統の製作を見ます。一系統は笹篦にて文様を描いており、これは筑前直系の鋳物師によって鋳られている。他の系統は形も手法もややごつく、文様は判にて主要部分を押し出してその繋ぎに篦を使う手法をしている。真形釜も羽弱く底も丸底に近い。これは在来居住の鋳物師によるものと見られる。」と記し、前者を南条鋳物師作、後者を五分市作と見られるとしている。また「口薄く下部が次第に厚くなり火底で二分もの厚みのある釜と、口の厚さと火底と余り変わらないものとがある。前者は土砂荒く従って中型の削り方も粗末の感があり五分市作と考えられる釜に見られる特徴である。後者は土砂も細かく筑前釜に似た中型の削り方をしており、南条鋳物師作と推定される釜に見られる。」と記している。

2―4、細見良（古香庵）

事業家であり、古美術収集の趣味を深め香取秀真の教えを受け、釜の鑑定眼を高めていった。とりわけ長野埜志の著作に触発され、代表作『茶の湯釜』図録を昭和四十八年に著し、長野説を批判した。しかしこと越前芦屋釜に関しては長野説を引用するなど、独自の知見は述べられていない。また越前芦屋釜の記述の中で「筑前芦屋の工人が海路を越前の鯖江地方（五分市今の味真野村鯖江の東南2里）に原料の砂鉄を求めて…」と記すなど当地の地理に暗いようであり、当地に来訪したとは考えにくい。しかし越前芦屋釜として九口を挙げ、長野埜志が取り上げたものと同じものは三口のみであり、新規に六口を挙げている。長野同様に全国的な視野で比較研究されたものと見られるが、先学や長野説以外の新たな知見は無かったものと見られる。

また長野が「本願越前国蓮蔵坊　湯殿山大日坊筑前国葦屋津本金屋寄進」と鋳込まれている芦屋釜について、筑前芦屋の釜師が出羽三山の湯殿山大日坊に寄進したものとした。これに対しても細見は一乗谷の朝倉氏遺跡の湯殿に寄進したものと批判した。しかし一乗谷の湯殿は朝倉氏居館の付帯施設の客館であり、信仰施設ではなく、細見の勇み足であったといえよう。

細見の著作を年代順に記す。

S41・09　茶の湯釜入門
S45・01　釜　茶の湯釜の研究
S45・10　名釜と茶器　石川県美術館（寄稿）
S49・09　茶の湯釜

2―5、森田藤則

武生市の文化財調査委員を長年に亙って勤め、多様な文化財の保護に尽力した。とりわけ越前釜の収集と調査を精力的に行い、昭和四十六年から越前釜の研究論文を相次いで発表した。前述のように長野の著作にも論文を転載されるなど、その実績は広く知られている。特に弘願寺蔵の越前芦屋の竹梅紋真形釜を世に紹介するとともに、市文化財指定に尽力した。故人となられたが御遺族の御好意で、森田が収集した二百口を超える釜や研究資料は武生市に寄託され、後学の道しるべとされた。当資料により、森田の仕事振りを述べてみたい。

釜の収集と調査は昭和四十五年頃から始め、分類仕分けカードに二十数項目にわたって特徴を記し、文様や環付の乾拓本と各部位の写真も整理保存されている。こうした膨大な資料と収集釜とによって研究を深めた。収集釜の大半は昭和四十五、六年に取得し、これをもとに論文をまとめたものと考えられる。著作を順次書き上げると次の通りである。

S46・02　越前文化2号　越前釜私考
S46・06　越前文化5号　南越の鰐口資料1
S47・05　越前文化6号　越前釜1
S47・06　越前文化7号　越前釜2
S49・03　武生市史民俗編　五分市鋳物師と越前釜
S53・01　若越郷土研究23―1　五分市鋳物師考1
S54・04　岡島美術館　芦屋釜名品展（共著）
S60・10　市越前の里郷土資料館　武生の工芸展（共著）

『越前釜私考』では、鋳物師の立地要件、口碑・伝説、遺物、古文書、越前釜分類、特徴を記した後、炉釜の代表作を編年順に紹介している。しかし釣釜については中断し、次項の『越前釜』として稿を改めている。

『越前釜1』では越前国の鋳物師について、松岡、五分市、鋳物師、敦賀、島、金谷、三国を考察した。『越前釜2』では越前釜の分類法、越前釜の二つの系統、湯茶釜と茶々釜までを載せ、未了となっている。しかし『越前文化』は昭和48年1月の第8号で絶版になり、途絶えてしまっている。ところが寄託資料の中に当原稿が存在し、後書きによれば昭和47年12月には脱稿していたのである。続稿は原稿用紙100枚ほどで「越前釜の各部分の特長と編年法」として、「口づくり、胴・火包・火底、型持、羽、環付、足、蓋、肌と鉄味について、装飾・模様」について五分市、島、松岡、敦賀、金谷の特徴を考察している。また『越前釜1、2』の原稿を精査すると、紙数に制限があったためか稿をかなり落としている。例えば序文を落とし、越前産鉄地探索の項も落としている。これほど精力を費やされた労作を何故世に出され無かったのか。何か他に考えがあったものであろうか。また『越前文化』も武生市立図書館のみの蔵書であり、幻の書となっている。いづれにしてもご遺族の了解を得て、是非とも活字化したいものである。

長野は越前芦屋釜の産地を五分市と南条鋳物師としたのに対し、森田は五分市と敦賀とした。一見異説であるかのようであるが、南条鋳物師に伝わる口碑「義景が敦賀天徳山築城に際し築城用具の鍛冶として南条鋳物師から移住させた」との説を両者とも採っているから、同説と云えよう。

ちなみに『新保家鋳物業略歴調査報告』によれば当初、南条鋳物師で稼業した河瀬相模守の一族の後裔が府中、敦賀に鋳造業を創始するもの多数輩出す。と記している。こ

れも何らかの伝承に基づいたものであろう。しかし敦賀では河内国佐山郷西堀村鋳師久吉の末孫としている。(1)(2)

参考までに敦賀市鋳物師の中世期の状況についての論考があるので付記しておく。(3)

森田は敦賀での作釜開始を室町末期とした。そして口縁部の上端に断面が半円の一重隆起圏線が鋳出されている特徴は敦賀作以外には見られない。不昧公の大名物油屋釜、武生市指定文化財の弘願寺蔵竹梅紋真形釜をはじめ明治初年の敦賀鋳物師の終末まで一貫してこの特徴が存続していたと論じている。(未発表資料)

また長野は「敦賀鋳物師の作でないかとした越前釜の地金は五分市系と錆味がやや異なるのは日野山以外の鉄を混入したものでないかと考えられる。或いは輸送の関係上近江砂鉄を混入したのかもしれない。」(4)としているのに対し、森田は「敦賀鋳物師の釜は室町期までは五分市と同様に見事な鬆立ちしているが、桃山期になると鬆は激減してくる。五分市の場合の江戸中期の作ほどの状態になる。敦賀は古くからの開港地であり、越前窯が交易品であるのと同様に、出雲、伯耆の鉄材が古くからの重要取引品目である。」(未発表資料)とし海運に着目している。

釜比定の点では田辺氏蔵竹蔦唐草紋肩衝釜の五分市作の1口のみの一致であり、一見隔たりがあるように見える。しかしこれは長野と森田との釜データ収集域の違いによるものであり、明確な差異として捉えがたい。

更に森田は次の発見もしている。敦賀作には天命系の作が見当たらない。五分市作には素文三足釜は終始、天命系の技法を守っているのに対し、敦賀作は素文三足釜の場合にも古いものは（江戸初期～中期頃）は芦屋系の技法が濃厚に影響している混合形態である。(5)と記しており、長野の「在来鋳物師は五分市で、芦屋系鋳物師は南条鋳物師（後に敦賀に移住）で作釜した。」を補強する発見とも云えよう。

森田の前出の遺稿には口作り、羽、型持、火底、足、釜肌、文様など産地別の特徴を整理した上で、越前釜の脇釜とも言うべき松岡、島、金谷、三国を加えた釣釜の製作年代と特徴も記されている。未発表の稿であるので多くの引用は差し控える。

2―6、根来茂昌

釜師根来実三の子息で釜作に携わる一方、『茶の湯釜』を著している。それには越前芦屋釜として油屋釜と旧出の1口を加え、2口を挙げるのみである。よって越前芦屋釜への新たな知見は見当たらないが、興味深い見解を記しているので紹介しておく。芦屋釜は筑前芦屋の砂鉄を使用し、大内氏の滅亡により、芦屋の釜師は新たな販路と鉄材を求めて各地へ移動した。これが大方の見方であった。しかし根来は「芦屋の砂鉄が秀作を生み出す良質で大量の釜作を賄ったとすれば、釜師は芦屋を捨て去る筈がない。」(6)と疑問を呈した上で、「当時は大陸との交易が盛んであった故、輸入鉄を用いたのではないか。」との見解を記している。

しかし芦屋町教育委員会の『山鹿田屋遺跡調査報告』では「芦屋海岸の砂鉄は高チタン含有で難還元性の塩基性であり、高度の精錬技術が必要になったが、性能の良い送風装置を使って還元雰囲気を得る竪形炉の排出滓を検出した。」(7)と記し、既に古代に当地で大掛かりな竪形炉の存在を示唆している。また『筑

前金屋遺跡調査報告』によれば鋳造用こしき炉の炉台と釜の鋳型の一部が出土している。そして炭素4％台の銑鉄で高チタン含有塩基性砂鉄が原料であったことが確認されており、当地方の砂鉄を使用した可能性が高くなってきた。むしろ高チタン含有塩基性砂鉄を使って芦屋のなまず肌と言われるように鬆立ちの無い釜を鋳る高い技術が確立していたと考えるのが合理的ではないだろうか。(8)

しかし現時点では根来説が否定されたわけではない。

2―7、長野裕

前出の長野垤志の次男で釜作に携る一方、『茶道具の世界　釜、炭道具』を著している。それには越前芦屋釜を6口挙げ、内4口は新出である。しかし比定の根拠は硬質で鬆立ちが多く鋳型砂が荒い点などの特徴を挙げており、概ね長野垤志の知見を受け次いだものと考えられる。

2―8、越前釜一覧表（巻末参照）

近現代の著作に見られる越前釜を一覧表に整理し、その著の図録番号を付した。

2―9、越前釜参考文献一覧表（巻末参照）

・釜関係資料
・鋳物師関係資料
・鉱山製鉄関係資料
・関連資料

本論考の調査対象として取り上げた釜関係文献、鋳物師に関する論考・資料、鉱物に関する資料、製鉄研究の論考、鎌、金工関係、発掘調査報告等を挙げる。

2―10、近現代の研究資料のまとめ

近現代のまとめとして前田泰次の『茶釜の旅』の論評を引用する。

・香取秀真

『新撰茶之湯釜図録』は茶釜の学術的研究書としての草分け役を果たした。しかし『釜師之由緒』『名物釜所持名寄』や『茶道筌蹄』『鋳家系』から曳く所が多いように思われる。江戸期の文献をどこまで信用してよいかは問題がある。この点で香取の研究にも或る限度があったと見るべきだろう。

・長野垤志

釜師が書いた茶釜の歴史及び技術的変遷史書として最も力作であると共に、よく作例を拾っている。芦屋系の特色と天命系を対立して考え、鋳造技術的及び造形的特色とその変遷を追う研究書として重要な参考文献と云えよう。また芦屋系と称される釜が日本に所々あるのを丹念に拾って、その特色を釜師の目から指摘しているのが『あしや系の釜』である。古芦屋の研究を進めると共に自らが古芦屋釜の復興につとめ、砂鉄釜鋳造に成功した努力は、近代鉄鋳物史上に特筆すべき彼の業績と云えよう。また釜の材質の相違や産地や時代による釜のそれぞれの部分の様式の違いなどを簡単に説明している。

茶釜の起源論や作品の年代鑑定については細見良とかなり対立するところがある。とし長野説には前田自身も疑問を呈している。

・細見良

日本の古代土器や絵巻物等を基礎に、茶の湯以前の鉄釜を考察し、和鏡の模様と釜の地紋の関係を研究している点では長野垤志と研究手法は同じである。また芦屋釜の鐶付や釜の口から肩を通って胴に流れる線の時代的変遷など実物実測の上での論考に特色がある。天命や京釜については芦屋釜ほどの熱を入れ

ず、地方の芦屋釜についても軽く触れる程度である。

以上は前田の著書を引用した。(9)

・森田藤則

森田論文の序文によれば、「学生時代から鋳物師聚落の解明に興味を持ち調査してきた。」と述べ、特に晩年になって越前釜の研究を精力的に進めた。そして千余口の釜を調査し、自ら約三百口を蒐集した。また長野・細見等との親交もあり、越前釜の研究の論文を発表した。そして森田コレクションとして、約三百口の収集した越前釜を武生市に寄託している。

3、今後の課題

①鉱山・製鉄遺跡・鋳物師遺跡の発見と解明

日野山系の鉱山間歩はかなり把握されているが、未発見のものも多いようだ。とりわけ製鉄遺跡・鋳物師遺跡は全くの手付かずの状態である。

金津の砂鉄製鉄遺跡は調査報告がある。

②釜、鉄製品及び鉄滓の化学分析

福岡県芦屋町の遺跡調査報告では地元の八幡製鉄が専門的な化学分析をしており、釜場遺跡や精錬遺跡の調査で実績を挙げている。しかし当地では皆無の状態である。また中世の金属器遺物の化学分析もできていないようだ。かなりの温度差を感じる。

③近世作釜の鉄材産地解明

森田コレクションは多くの越前釜の収集品をよくぞ残していただいたものと高くその功績を称えたい。また武生市には掛け替えのない文化資産を大切に保存していただくことと、今日の進展した化学分析技術によって、釜・製鉄精錬遺物・鉄滓等々のデータを付き合わせ、産鉄地の解明に着手を願いたいものである。

第2章、越前芦屋釜に関する調査研究

第1章で見てきたように、越前芦屋釜はどこで作られたのかについて、納得できる証明はなされていない。また先学の研究は主として釜そのものに向けられており、当地の鉱山・製錬・鋳物関係の遺跡・遺物にはアプローチされていない。

筆者は釜に加え、その素材の産鉄地・釜製作地の両面からの解明が不可欠と考え追跡した。判明した事柄を記してみたい。

1、鉱物関係資料と越前釜の産鉄地・製鉄遺跡

鉱山・製鉄遺跡の予備的な調査

『福井県鉱物誌』(昭和8年市川新松著)によると

・磁鉄鉱(Fe_2O_3)は「三国港及三里浜の沿岸に於ける第4紀新層の細砂中に風或いは波の淘汰によって砂鉄が天然に集められてある。敦賀郡東浦村、杉津浦及松原村等の沿岸に於いても花崗岩の分解によって生じたる第4紀新層の細砂中より砂鉄を集むることを得べし。同郡粟野村野坂鉱山よりは古世紀変質岩中より塊状の磁鉄鉱を出ず。南条郡鹿蒜村二屋鉱山に於いては古世紀岩中より塊状の磁鉄鉱を出ず。塊状をなせる磁鉄鉱はまた今立郡味真野村入谷に近きロクロシ鉱山に於いても見出さる。」とある。よって敦賀鋳物師、三国鋳物師はこうした砂鉄を得て作釜していたとも考えられる。以上は真砂（比較的良質な砂鉄）を得られたことであろう。

・褐鉄鉱(FeO)は「黄鉄鉱後の褐鉄鉱は丹生郡朝日村佐々牟志神社の土壌中より出ず。里人之を呼びて天狗の撒きたる砂と云う。」これは金谷の山続きの佐々生の記述である。また『常盤郷土誌』では「鉄鉱は金谷区の東側

の溜池の底にあたる所」(10)と記しており、同系統の鉱脈であろうか。金谷鋳物師はこれを用いたのであろうか。とすればあまり良質な鉄鉱とはいえない。

・閃亜鉛鉱(ZnS)「塊状をなせる閃亜鉛鉱は今立郡文室・入谷、南条郡牧谷鉱山等より出ずるものなるも結晶をなせるものは次の鉱山より出るものなり。今立郡上池田村魚見鉱山に於いては黒色の閃亜鉛鉱が黄鉄鉱とともに共産するものなり。

・黄鉄鉱(FeS)「今立郡上池田村魚見鉱山に於いては黄鉄鉱の結晶が褐色の粘土を含める含める多くの鉱嚢中より閃亜鉛鉱と共に出ずるものなり。南条郡北杣山村牧谷鉱山の本間歩に於いては立方体或いは立方体と五角十二面体との集晶よりなりたる結晶が多量に産出するものにして径一乃至六センチに達す結晶の大なることは其名本邦に高し。今立郡味真野村文室鉱山よりも閃亜鉛鉱、方鉛鉱(PbS)等と共に立方体をなせる黄鉄鉱の結晶を出ず。」

・磁硫鉄鉱(FeS)「南条郡北杣山村牧谷鉱山の本間歩に於いては塊状をなせる磁硫鉄鉱が方鉛鉱及閃亜鉛鉱等と共に鉱嚢中より多量に産する。本鉱物は目下ベニガラの原料に用いらる。」

・硫カドニュウム鉱(CdS)「今立郡味真野村文室に於ける亜鉛鉱山よりも産するものなりと云う。」以上が日野山系の鉱物の記述である。

また当地の小字名は多くの鉱山及び関連名がみられる。文室では矢ノ谷、金砂、銀山、鋳場、萱谷では釜屋敷、中居では金ケ谷、鐘ケ谷、釜ケ淵、入谷では金場、桧尾谷では鍛冶田、大坪では鍛冶屋畑等である。いずれにしても製鉄精錬遺跡の発見によって越前釜の原料採鉱地が証明されるものと考えている。

2、日野山を中心とした鉱山遺跡の探査

2―1、武生市文室地区の鉱山遺跡

①秋良谷銀山遺跡

地元では銀山跡と伝えられている。大戦前後まで石灰石採集が行われ、主として秋良谷の南側斜面で稼業領域が重なり破壊されたが、その他の銀山遺跡はほぼ当時のまま残っている。間歩、登り窯、沈殿池、飯場、神社等の石積遺構が比較的良好に残存している。

160字秋良谷の谷あいを登ると、およそ長さ10m・幅10m・深さ1mほどの広さの沈殿池遺構があり、その上手の北面のふもとには神社の石積みがあり、その台上に自然石に「神明神社」と彫られている。南面のふもとには小さな坑口があるが閉塞されている。またその上手一帯には谷川に面して石積み開削平地が諸所に散見される。ふもとより谷あいを500mほど登った谷の正面右脇に主坑口がある。坑口は2m隔てて2つあり、人工的に閉塞されている。坑口から直下の谷にズリ出しが行われ、幅20m長さ30mほどの大量のズリが捨てられている。更に上方20mにも小さな坑口がある。このあたり一帯の左上方で石灰石の採鉱が行われたため、旧態は破壊されている。主坑口周辺には随所に比較的小さな空間の石積み遺構が散見され、坑夫の飯場跡と見られる。ズリ場の下端より50m下がった南側の斜面に奥行き10m・幅10mの開削平地があり、そこに10mほど隔てて主軸が北西方位の2基の登り窯跡がある。主坑口付近より採集した鉱石の主成分は鉄・亜鉛であった。

なお近年に主坑口の左上方と左側脇の斜面で石灰石採集

が行われ、そこより南斜面を真横東方向に1m幅のトロッコ道が作られ、前出の南谷のふもとまで石灰石が運ばれ、そこで石灰が焼かれていた。南谷のふもとには石灰用穴窯の遺構も残っている。更に南斜面を谷のふもとまで延びるトロッコ道が開削され、谷のふもとにも石灰用穴窯の遺構も残っている。

②南谷銀山遺跡

地元では銀山跡と伝えている。159字南谷にあり、山裾の平地を除いて、北東方位の斜面にある銀山遺跡はほぼ当時のまま残っている。斜面をおよそ10mほど登った山の中腹より上方の斜面に間歩が幾重にも掘られ、間歩数は約10程度と見られる。正確に把握できない理由は旧間歩の上部に新間歩が掘られ、旧坑口が自然閉塞されている為である。間歩群の最下方には2つの坑口が並んでおり、その坑口の前面に奥行き3m・横幅7mの平地があり、その直下から竪堀（鉱石搬送用）長さ60m・幅2m・深さ1mが二条並んで下方に向かって斜度40度の急斜面に掘られている。その竪堀に平行して40m下がった地点の両サイドに一基づつ登り窯が配されている。竪堀のすぐ東側にある登り窯はおよそ長さ20m・底幅2mであり、その登り窯の焚口近傍から鉱滓と炉壁片を採集した。（分析結果は後述）また、その焚き口の前面には奥行き3m・幅5mほどの開削平地があり、その下方一帯には小さく砕かれた主として石灰石のズリが捨てられている。前述の竪堀より鉱石を取り出し、第二次選鉱を行ってから登り窯に投入していたようだ。前述の竪堀の西側にもう一条長さ20mほどの竪堀があり、その下方に長さ20mの西側の登り釜が配されている。それらの竪堀の上端は坑口に面した平坦地直下となっており、採掘した鉱石を竪堀に投げ入れられるように配されている。竪堀は鉱石の運搬労務の削減をもたらすのみならず、落下の過程で粉砕が進行する、合理的な手法であると考えられる。坑口より南方に向かって長さ約100m・道幅1mほどのズリ出し用の横道が形成され、隣の小さな別の谷が長さ50m・幅10mの第一次選鉱のズリ捨て場になっている。ズリの大半は石灰岩である。ズリ出し道の南端にも坑口が5mほど隔てて2つある。この坑口は鉱害防止のため閉塞されている。左側の坑口は少しの隙間があり、そこから覗くと坑道には赤色の水が10cm程度溜まっており、明らかに鉄系の鉱脈であることがわかる。当間歩より採集した鉱石の主成分は鉄・亜鉛であった。また前記の竪堀の二条はふもとまで伸びており、ふもとには石留めの石積みが設けられている。比較的大きな鉱石はふもとまで落下し、ふもとで処理されていた模様である。

残念ながら南谷のふもとの平地は近代に畑化され、遺跡は破壊されている。なお現況は杉林となっている。

③下桂谷銀山遺跡

地元では銀山跡と伝えている。157字下桂谷にあり、西谷川の砂防堰堤より100m下流地点にある。西側堤防より約2m上の山の斜面に10mほど隔てて坑口が2つある。鉱毒対策のためにコンクリートで閉塞されている。間歩はかなり深く掘られていると地元の人は言う。2つの坑口の間には幅1mほどの作業道が設けられている。南側の坑口付近には採鉱溜と思われる微細鉱石群の塊（およそ幅2m・長さ4m・深さ1m）が露出している。この鉱石の主成分は鉄・亜鉛であり、前出の南谷・秋良谷と同様である。

④唐木亜鉛鉱山

唐木谷川第1堰堤の右方より山道を約1kmほど登った地点から東斜面に距離1km・幅2mのトロッコ道が作られている。山頂付近に横木で補強された坑口がある。坑口付近で採集したサンプルの主成分は亜鉛リッチの鉄・亜鉛であった。　長年放置されていたために坑口は自然崩落により閉塞状態になっている。戦前までは亜鉛鉱石を採鉱したと伝えられ、ふもとまでトロッコにより運搬され、ふもとには選鉱場・沈殿池跡が残されている。鉱石は氷見まで鉄道輸送され、そこから船積みされて電気精錬により亜鉛精製が行われたとのことである。残念ながら中近世の遺跡は近現代の開発により破壊されている模様である。

⑤下直谷間歩（別名瓜矢坂）

137字下直谷の谷川沿いに約500mほど上流の南斜面を5mほど登った地点に坑口がある。昭和初期まで稼業した跡と伝えられている。鉱石の主成分は鉄・亜鉛であった。

言い伝えによると古い鉱山を再開発したとのことである。間歩内にトロッコが引き入れられ、ふもとまでトロッコ道が残っている。間歩下方には選鉱場跡も残っている。また選鉱場より下方一帯は田地化されており、古い遺構は破壊されている。なお現況は杉林となっている。(11)

⑥秋良谷・南谷遺跡の比較

南谷銀山は三条の鉱石輸送用竪堀と左右に2基の登り窯が配され、ズリ捨て場も別の場所に設けるなど、鉱山プランの基に合理性を追求して作られている。組織的で資金力に富んだ経営が行われた印象があり、近世の鉱山遺蹟である様に思われる。

一方、秋良谷銀山は石積みの坑夫飯場跡が諸所に所狭しと見かけられ、また鉱山プランも理解しがたく、成り行きまかせの感がある。坑夫をふんだんに用いて稼業したようにみられ、秋良谷鉱山は南谷鉱山よりも古い時代の遺蹟と考えられる。また当地には「秋良谷七人衆は下文室の草分け」との言い伝えもあり、前記を補強するものといえよう。(12)

2―2、南条町鋳物師・牧谷地区の鉱山遺跡

①おとばみ鉱山遺跡

当遺跡は鋳物師56字不動山にある。不動滝に向かう駐車場の東20mにある谷川沿いを300mほど登った地点にある。東側谷ふもとの間歩はよく残存している。5m上方にはもう1つの坑口があるが自然崩落により閉塞されている。谷の正面一帯はズリ捨て場となっているが、量的にはさして多くない。ズリは大半が石灰石である。西面には全長20mで主軸が南東方位の登り窯跡が一基見られるが、雨水が流れ込み、窯底は流出している可能性がある。更に西10m、20mに2つの坑口が見られるが自然閉塞されている。鉱石を分析した結果鉄分が多く、亜鉛が比較的少なく、マンガンの含有が多いようだ。

駐車場より下方の緩斜面一帯は戦中に開拓地として拓かれ、鉱山の付帯遺跡は破壊された模様である。

②寺谷間歩

当遺跡は牧谷115字筆黒山・116字寺谷山にある。上牧谷の集落上手より約1kmほど北上した地点に簡易水道取水小屋がある。その地点より100m間の谷川の東側一帯にはいくつかの坑口がある。更に1kmほど登った谷川には切石を積み上げた砂防提があり、東側上流（20m）にも坑口が散見されるが自然崩落により閉塞されている。

簡易水道取水小屋より下方の緩斜面一帯は昭和初期に開墾され、水田となっていたようであり、鉱山の付帯遺跡は破壊された模様である。なお集落より200mほど北上した東

斜面ふもとにいくつかの坑口があり、自然閉塞されている。春先になるとそのあたりから大量の赤い水が噴出している。この間歩は昭和初期まで稼業していたとのことである。付近に鉱石置き場が残存している。また前述の2㎞上方の砂防提より東側上流（20ｍ）の谷川寄りには露天堀に近い状態で採掘されている。発破などを使用したものと見られる。紅殻の精製に用いられたものと見られる。砂防堰堤より10ｍ右岸下流には近代のものと見られる飯場跡の石積がある。

3、鉱物製錬遺跡と収集サンプルの調査

①登り窯

南谷銀山の東側の登り窯は斜度40度の斜面に作られており、焚き口の底幅は2ｍで長さ20ｍほどある。焚き口の平地は幅5ｍ奥行き3ｍほどの広さで、焚き口の東側5ｍ上方には幅2ｍ・長さ50ｍの横道が作られている。恐らく燃料の薪置き場であると推測する。窯は北東方位に向いており或いは季節風を取り込んで、窯の温度を高めた可能性も考えられる。中世窯業の登り窯と大きさを比べれば大型の部類に入るようだ。鉱業用として登り窯が使用された報告事例は多くないようであり、鉄分を多く含んだ特異な鉱石であるため、越前特有の鉱業技術が育まれていった可能性が考えられる。（後述）

越前古窯で用いられた登り窯との関連や、朝倉氏が山城に用いた畝状竪堀と鉱石運搬用竪堀の類似性も、時代考察の参考資料となろう。

②鉱滓

文室南谷の南側の登り窯の焚き口付近で鉱滓を採集した。外形は石炭カス状にスカスカになっているものと、採鉱時の破断面が残り、原鉱石より少し軽くはなっているが、比較的持ち重りするものとがある。いずれも鉱滓の表面は黒色で部分的に金属質が流出した空隙が散見される。分析の結果、スカスカ状の鉱滓は鉄・亜鉛の残量はわずかであった。持ち重りする鉱滓の表面はクレータ状になっており、部分的に光沢のある金属質が滲みだしている。持ち重りがする鉱滓も2系統ある。表面の空隙中に径0.5㎜程度の水晶柱が立っているものは内部も水晶の結晶が多く、分析の結果内部・外部とも鉄・亜鉛が良く抜けている。一方、石灰分が多いものは、表面には少しの鉄とチタンが残っており、内部は石灰・マンガン・鉄は多く残っているが、亜鉛は良く抜けているようだ。よって石灰質の鉱石は内部に鉄を閉じ込められているようだが、表面は鉄分を溶融しており、存外に鉄分が抜けている。

③炉壁材片

南谷の登り窯の焚き口付近で炉壁材片を採集した。炉壁片は赤土を用いた赤色で表面は黒く変色してしている。この断片は少し磁気反応があり、分析の結果、表面からFeを検出した。

なお当地の近代の石灰用穴窯の構造は筒状に石を積み上げ、その内側を赤土で塗り込めた構造になっている。登り窯の炉底・炉壁も同じような構造であったとも考えられる。

④まとめ

以上のことから登り窯は温度バラツキがあり、最高温度が十分であった部分と、不十分な温度であったため、鉄分を溶融し切っていない部分もあったと考えられる。

登り窯はふいごを伴わない構造であるため最高温度に限界がある。なおZnの融点は420℃、Agの融点961℃でFeの融点1539℃に比して低い

よって当登り窯は主として亜鉛・銀の粗分離に用いられたものであろう。しかしスカスカの鉱滓は鉄を溶融し切っていたし、炉壁材にも鉄が吸着しており、収率は低いながらも鉄が得られていたものと見られる。なお『鉱山の歴史』によれば「銀鉱は盛時には粉砕し淘汰する　という選鉱を行わずに、そのまま吹く良鉱（石おろしという）の採掘が、むしろ中心であった」(13)と記している。しかし当地では鉄が多く含まれた鉱石であるため、時代が下がってもこの方式が取られたものと考えられる。なお鉱滓は登り窯の焚き口付近の竪堀中で採集した。また大量に鉱石が採鉱された割には遺存する鉱滓は存外に少ない。よって亜鉛・銀を粗取りした後の鉱滓はふもとまで運ばれ、再活用（鉄の抽出）が行われた可能性は高いと考えられる。つまりこの鉱滓は焙焼酸化したものと同じ位置づけともなり、この後に木炭を用いた還元精錬が行われた可能性が高い。(14)

ともあれ、収率は少ないながらも当銀鉱山より鉄を産したことは明白になった。

しかし越前芦屋釜の原材料産地を特定するには当登り窯の使用年代と釜の組成分析を突合わさなければならない。いずれにせよ正式発掘調査と年代測定結果を待たねばならない。

因みに江戸後期に発見され、稼業した堀名銀山跡（勝山市荒土町）の大吹所跡(15)を探査したが、登り窯ではなく、丸窯であったように思われ、粉砕・淘汰法によるものであろう。

4、鋳物師遺跡の探索と収集サンプルの調査

①鋳物師遺跡の探索

五分市釜、南条鋳物師釜の解明には、鋳物滓、鋳物鋳型の検出が不可欠になってくる。筆者は金屋堤（つつみ）（溜池）周辺を探索し、金糞（かなくそ）（鋳物滓）を採集した。萱谷の字釜屋敷でも金糞を採集した。その他、千僧供八王子鐘の大工の鞍谷長屋は今の五分市とも考えられ、このあたりの探査もしてみたいと考えている。また南条鋳物師の旧居住地とされる鋳物師52字中ノ谷のふもとの緩斜面地帯には、旧樫尾宅の門塀の石積みが長さ100mに亙って依存しており、鋳造場だったとの伝承がある。(16)居住遺構が諸所に見受けられる。鋳物滓の発見に努めてみたい。

②金屋堤の鋳物滓

五分市34字弁財天にある金屋堤の南方から流れ込む農業用水の排水路より採集した。また200m西方の排水路からも採集した。大きいもので2cm程度である。水中より取り上げた時は黒褐色であったが、数日後には赤銅色に錆化した。一見石炭カス状になっており、比較的軽い。鉄滓中に雑多な塊状異物を含んでいる。さらに滓中に4mm程度の黒褐色で緻密な丸みを帯びた塊状物が包含されている。こうした長球形塊状物は2～10mmのものを単体でいくつか採集した。分析の結果、鉄滓の主成分はFeでCaやZnは検出できなかった。大きな塊状物はSiとFeを検出した。よってこの塊状物は低融点の鉄かんらん石（融点1205℃）と判明した。(17)比重の重い物質中で石英・水晶と鉄が溶融して水玉状になり凝固したものであろう。登り窯の鉱滓では水晶の結晶が見られたが、この鉄かんらん石は精錬の過程を経たか、鋳物溶鉱炉のいずれかによるものと見られる。中国地方産の砂鉄原料の鉄材を用いた鋳物滓ならば、このように多くの異物が混入している筈はない。さらに滓中にTiの検

出が見られないことから鉱石鉄滓（岩鉄鉱滓）であると考えられる。[18]或いは還元精錬の鉱滓であるかもしれない。なお当地域は耕地整理が行われているが、金屋堤はほぼ旧態のままである。

③釜屋敷の鋳物滓

萱谷（かやたん）23字釜屋敷の現況畑地より採集した。大きいもので2㎝程度で赤みを帯びた灰色であり、0.1㎜程度の塊状異物が含まれるが比較的少ない。分析の結果Pbしか検出できなかった。

④まとめ

金屋堤と釜屋敷の鋳物滓を比較すると、前者は黒褐色で後者は赤みを帯びた灰色であり、塊状異物の大きさや混入度合いが異なり、全く別系統の産地と考えられる。断定は出来ないが、岩鉄鉱滓であることから金屋堤の鋳物滓（還元精錬滓かもしれない）は文室産の鉄で、釜屋敷の鋳物滓は砂鉄であるように思われる。

5、五分市釣釜の観察

五分市釜と所伝のある小型素紋釣釜を一瞥すると外側は比較的滑らかな肌で、内側はハジキ肌である。仔細に観察すると、甑口と常張に小さな鬆立ちが多い。また毛切りより肩に向かう胴部に大きな鬆立ちが多い。大きな鬆立ちが集中する部分を起点として毛切りから釜底に向かってミミズが這ったかのような、ガス抜け、ガス溜り痕が見られる。甑口と常張の鬆立ちの原因は凝固収縮によるものと見られるが、胴部の鬆立ちの原因はガスの発生と見られるから、亜鉛の蒸気か、酸化金属の還元作用により生じたガスによるものであろう。一方、釜底の肌は滑らかであるのに対し、釜底の内側は径1～5㎜の半球状突起群（霙（みぞれ）紋）で満たされている。霙形成の原因は不明だが、釜底に集中していることと、肌が突起状であるから、中型（なかご）に荒砂を使ったことが原因ではないであろう。火底はほとんど生ぶの状態であり錆は見られない。三足には赤錆、内底には部分的に層ハガレ状の錆が見られるが、総じて錆は少ない。いずれにしても釜の化学分析により素材の産地解明をしたいと考えている。

6、五分市鋳物師の初期の居住地

『鋳物師稿』によれば「松村家由緒：今立郡上真柄村の類地島に引き移り空地に屋敷を構え共、元来水地にて職業なりがたく五分市へ移り一町四方の屋敷七ケ所に鋳形干場細工場を…」[19]と記している。また真柄保の四至は今南東郡と今南西郡の郡境は菊原路（だんはらみち）であった。[20]島（今南西郡内）と金屋村（今南東郡内）は地続きで村落内を菊原路が通っていたと考えられる。また金屋堤（五分市34字弁財天）では鋳物滓があることから鋳物師の稼業した地域であることが明白となった。また大永中大瀧寺々庫収納田帳では大蔵町鍛冶屋村大工新衛門が見える。[21]当地は金屋3字御蔵田、五分市36字御蔵田、北小山39字御蔵田町に相当すると考えられ、菊原路の街道沿いに出来た町屋であったかもしれない。ちなみにこの大蔵は郷家に関わる郷倉に由来する地名であり、今立郡の郡家に関わる正倉であった可能性もある。当時の朝倉街道は南より南条町大道から牧谷に入り、牧谷越えで武生市萱谷町に入り、菊原路を通っていたと考えられる。また少し北上すれば大滝寺に向かう参道と直交している。大滝寺の参道を西に向かえば府中（武生）であり、将に交通の要衝となる主往還沿いに出来た町屋で、比較的広い区

域に広がっていたのではあるまいか。なお金屋村は小山村に属していたが、江戸期に訴訟沙汰により金屋村として分村した。一般的には金屋は鉱山・鍛冶等の関係地名である。金屋の地名はそのあたりの地名呼称か、何らかの伝承を元に名付けられたものと考えられる。

7、越前釜（五分市釜）の原材料について

文室の銀山では鉄を産したし、金屋堤の鉱滓は鉱石鉄滓であることは疑問の余地がない。また鉱石鉄滓の報告事例は非常に少なく、高い確立で当地産のものと言えよう。また五分市釜の鬆立ちの原因はガスであり、亜鉛含有の当地産の鉄が使用された可能性が高いと考えられる。

少々強引ではあるが、五分市釜について「鉱山―登り窯鉱滓―金屋堤の鋳物滓―五分市釜―松村家伝承の故地」と一通りの道筋がついたように思う。以上を踏まえ全体を考察して見たい。

伝承によると銀山は採算が取れないので廃鉱になったと伝えられている。このことから当地の銀山は鉄・亜鉛を中心とする鉱脈から銀を精製していたが「銀含有率が少ないこと」「鉱石の硬度が硬く採鉱・精製コストが高くついたこと」「副次的に得られる鉄・亜鉛の市場単価が安いこと」「鉄への異物混入が多いなど品質的に劣ること」などにより採算割れを生じ、休・廃鉱に追い込まれたものと考えられる。よって当初、越前釜（五分市釜）は当地銀山の副産物の鉄を用いてきたが、近世中期になると採算割れのため地元産の鉄が得られなくなり、単価の安い中国地方の鉄を用いるようになったとのストリーも想起できる。あるいは萱谷釜屋敷ではこうした時期に中国地方の鉄を用いて釜作が行われたことであろう。また当地の鉱石の亜鉛含有率は鉄とほぼ同じ割合であり、登り窯による真吹き（酸化製錬）のため酸化が進み、酸化鉄・酸化亜鉛が多く含まれていたはずである。またチタンも検出されているので、砂鉄製鉄に比べ、より多くの木炭を要する還元精錬を余儀なくされ、炭素分の多い銑鉄になったものと見られる。地金が硬く錆びにくい要因はこの辺りにあったかもしれない。また当地の鉱石を破砕した面を放置しておくと破断面全体に白い粉吹いた錆が現れることを確認した。これは長野の云う五分市釜の肌の特徴に通ずる。『理化学辞典』によれば「酸化亜鉛は軽い白色粉末で、太陽光で燐光を発し、陰極線・陽極線などでは緑色、紫色などを発光する。」とある。

よって「越前芦屋釜は尻が重くて地金が硬く錆び難いので丈夫で長持ち」の特徴は、銀精製の副産物の鋳鋼に近い炭素分の多い素材を用いたため、硬くて錆にくいものになったものと考えられる。よって断定的なことが言える段階ではないが、長野説・森田説の越前釜比定の証明に半歩近づいたと感じている。

一方、大方の先学が「越前芦屋釜は砂鉄を原料とした」とした点は論拠を明示しておらず、筆者は頷き得ないのである。

後書き

読み返してみると、我ながら偏っていると認めざるを得ない。特に釜の形状や文様を取り上げていない。著作権の問題もあり、わずらわしさにかまけ、読者の方には分かりにくいものになってしまった。知り得た図録等はほとんど入手して調べたが越前とされている

釜は丁度100口ある。それにしても大名物の油屋釜などはすばらしいものだ。多くの秀作の越前釜は中央へ旅立って行ったのだ。里帰りを果たしてやりたいものだ。

尚、本論は森田コレクションに拠るところが大きい。故森田藤則氏のご子息　森田俊太郎氏より閲覧と引用の同意を得たものであることを付記しておく。ここに謝辞の意を表するものである。

---

(1)東京国立博物館紀要7　由緒鋳物師人名録　p.286
(2)茶道全集8　器物編2　茶釜の歴史　p.339
(3)国立歴史民俗博物館研究報告77　越前における法華信仰の展開（敦賀市鋳物師地区の小型石造物考）
(4)あしや系の釜　釜の材質　p.14
(5)越前文化第6号　越前釜1　p.81
(6)茶の湯釜　茶の湯釜の知識　p4-4
(7)山鹿田屋遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査　p.21
(8)考古学と自然科学　第20号　鉄滓の成分分析からみたわが国古代の製鉄技術　p.71　砂鉄製鉄でCaOを意図的に投入し、Tiの還元除去を行っていた事例を報告している。古代の茨城・福島遺跡の事例であるが、こうした技術は流通していたかもしれない。
(9)茶釜の旅　茶釜の参考文献　p.282-290
(10)福井県丹生郡常盤郷土誌　金谷鋳物師集落の研究　p.32　筆者は金谷集落より東南方向約500mにある溜池付近（14字・鎌畔）褐鉄鉱片と砂鉄を採集した。また12字・宮の下で鋳物滓を採集した。この鋳物滓中には泥塊状の紅柄（酸化鉄）が含まれているものがあり、良質な原料ではなかったと考えられる
(11)下文室の山本興右衛門氏談「戦中まで唐木鉱山に勤務した。当時、下直谷は休鉱となっていたが調査のためトロッコで坑内に入ったことがある。」その他、当地の鉱山事情に詳しく、色々教示を頂いた。
(12)下文室の坂永甚兵衛氏談「下文室は石上村と称していたが、秋良谷七人衆はこの村の草分けと聞いている。山口九兵衛、宮本新左衛門、大永仁兵衛、山下甚右衛門、坂永甚兵衛、山本興右衛門、□□勘兵衛の七家である。以上とは別の家系の山口勘左衛門は約六百年前に鉱山技師として当地に赴任し定住した。この家のみは時宗府中称名寺の檀家である。以上の各家は秋良谷の谷口に居を構えていた。また秋良谷にある神明神社（明治期に五皇神社に合祀）は石上村の氏神である」
(13)鉱山の歴史　近世の鉱業　鉱山の生産組織　p.170
(14)日本鉱業史要　古代に於ける鉱山技術の研究　銀銅の古代製錬法　p.99　対馬の佐須・安田鉱山は方鉛鉱・閃亜鉛鉱・磁硫鉄鉱であり、古代製錬法として酸化焙焼法によったと記している。日野山系の鉱石と類似しており参考にした。
(15)続日本鉱山史の研究　越前堀名銀山　堀名分銀山之図　p.324
(16)南条町誌　村の歴史と人　鋳物師　p.192
(17)前掲(8)　p.74　かんらん石の液体は比重が軽いので湯上に浮上し、炉内の温度安定化や鉄の酸化防止の効果がある。また鉄を晶出させるための温度・酸素分圧の適正条件として液状化した鉱滓が目安となる。こうした技術的意義を熟知していた工人の存在が伺える。
(18)前掲(8)　p.68-69　福井県の砂鉄はチタン含有塩基性砂鉄であり、この製錬滓には15～30％程度の酸化チタンが含まれ、岩鉄製錬滓の0.1～0.2％と大きな開きがある。
(19)鋳物師史稿　松村家由緒書　p.162
(20)福井県史　資料編2　中世　p.288　「真柄保　在今南西郡内　四至　東限郡境并蔺原路」とある。
(21)岡本村史　史料編　大滝神社文書　p.86

越前釜の掲載一覧表

数字は著作物の図版番号　○：越前比定　×：越前否定　△：参考記事アリ

書籍名		名物釜所持名寄	新撰茶之湯釜図録	釜歴史と鑑賞	あしや系の釜		茶之湯の釜	茶之湯名釜図録	茶之湯釜全集 越前・伊勢		茶の湯釜名品図録	茶道具の世界 釜・炭道具	茶の湯釜入門	石川県美術館名釜と茶器	釜茶の湯釜の研究	茶の湯釜	観世コレクション釜と掛物	茶道美術全集 釜	日本の美術茶湯釜	雲州蔵帳図鑑	茶の湯釜	岡島美術館茶器・釜展	越前文化越前釜私考	越前文化越前釜(2)	五分市鋳物師と越前茶釜	岡島美術館芦屋釜名品展	たけふの工芸展
著者		西村道冶	香取秀真	木下桂風	長野埜志		長野埜志	長野埜志	長野埜志		長野埜志	長野　裕	細見古香菴	細見古香菴	細見古香菴	細見古香菴	原田一敏	蔵田　蔵	鈴木友也	白崎秀雄	根来茂昌	猪飼、他	森田藤則	森田藤則	森田藤則	猪飼、森田他	森田藤則他
著述年		元禄13年	昭和8年	昭和28年	昭和32年			昭和41年	昭和48年		昭和50年	平成12年	昭和41年	昭和45年	昭和45年	昭和49年	平成9年	昭和45年	昭和48年	昭和50年	昭和55年	昭和42年	昭和46年	昭和47年	昭和49年	昭和54年	昭和60年
作地					鋳物師	五分市			五分市	鋳物師																	
釜名称	所蔵																										
真形釜地紋麒麟	(小出仁左衛門)	○																									
檜原釜　銀付瓶子地紋檜原東山蔵所持	(袋屋宗吉)	○																									
油屋釜　古越前伝竹藪紋二輪草地紋乃下袋モ有	(田屋常甫)	○																									
鶴首羽釜	香取秀真		○46															○15		×芦屋	幕張図 産地名ナシ						
八角筒釜	東京国立博物館		○47	×22 古芦屋															102 産地名ナシ								
文福茶釜　応永21年銘	手銭白三郎								○1															△記述アリ			
松竹梅の図　真形釜	反町十郎				○1			○3		○23	○2																
松竹梅の図　甑口釜	梅沢記念館				○2				○5																		
龍の図　真形釜	反町十郎				○3																						
霰　真形釜	山田惣吾				○4																						
松梅の図　真形釜	高野時次				○5																						
松竹梅の図　甑口釜	稲熊太郎				○6		○11	○4		○24	○3																
梅竹の図　真形釜	渡田喜一郎				○7																						
素紋　平くも釜	鈴木宗保				○8																						
甑口羽釜	梅沢彦太郎					○9																					
梅竹の図　真形釜(重美)	石洞山房					○10			○3		○1																
霰　真形釜	長野埜志					○11			○11																		
四君子の図　真形釜	諸戸精文					○12																					
玉川釜(山吹竪筋の図)						○13		○5	○9			○															
桜の図　平くも釜	加藤忠三郎					○14																					
栗楓の図　尾垂釜	細見古香菴					○15							○14		○解説図	○77 解説図30			111 産地名ナシ								
松梅の図　真形釜	成田幾治					○16																					
笹蟹の図肩霰　真形釜	太田幸次郎					○17	×21石見						○解説図			○79											
松竹梅の図　真形釜	梅園英勝					○18			○17																		
鳥の図　甑口羽釜	志賀晴村					○19																					
桐鎖付　香炉釜	石川甚治郎					○20																				○18	
桜竹巴散肩霰　真形釜	幸節静彦					○21										○82											
菖蒲の図肩霰　真形釜	瀬川昌世					○22																					
雲龍の図　釜	細見古香菴					○23																					
竹鳥唐草　肩衝釜	田辺興平					○24																	○11	○6			
松梅の図　真形釜								○1	○2																		
霰　真形釜	式守とし子								○4																		
松竹梅の図　甑口釜									○6																		
松梅の図　真形釜	手銭白三郎								○7																		
鶴の図　真形釜								○7	○8																		
松竹梅の図　真形釜							○10	○6	○10																		
霰　真形釜	梅園英勝								○12																		
霰　真形釜									○13																		
霰　真形釜	宮村太七郎								○14																		
鶴首羽釜									○15																		
松竹梅の図　真形釜									○16																		
平釜	北瓜宗甫								○18																		
梅花の図　平釜									○19																		
松竹梅の図　真形釜	上野堪一郎								○20																		
梅竹柳の図　真形釜	梅園英勝								○21																		
松竹梅の図　くり口釜									○22																		
梅竹の図　平釜								○2		○25																	
松竹梅の図　甑口釜	高野光正									○26																	
松竹梅の図　甑口釜	水井淳一郎									○27	○4	○															
霰　真形釜	星野高慶									○28																	
蕨　真形釜										○29																	
梅竹の図　真形釜										○30																	
桐橘丸紋霰真形釜										○31																	
蒲菊図　甑口釜								○8																			
甑口梅竹図文釜															○64	○51					○						
桜地紋平蜘蛛釜	岡　林													○30	○74	○31	○11									○2	
薩に菊図文真形釜	松下幸之助												○13		○75												
竹椿図文真形釜	柳　孝氏												○15	○29	○76,77	○32,76	○9		×58芦屋							○1	
竹林図　真形釜																○78	○10		110 産地名ナシ							○4	
肩霰巴文　真形釜															○解説図	○解説図32											
平釜												○															
松竹梅甑口尾垂釜												○															
梅松文甑口釜												○															
檜垣梅竹文甑口釜												○															
松竹梅双鳥文甑口三足釜	城福寺						○挿4	○挿4			○挿4																
松梅文甑口三足釜	城福寺						○挿4	○挿4			○挿4																
素文甑口釜									○形態説明																		
柳蹴鞠文肩衝釜	亳接寺																					○					
松竹梅文切掛釜	猪飼全邦																					○				×19	
竹虎地文釜																										○5	
霰文真形釜																									○1	○14	
素文真形釜	森田藤則																									○15	
梅竹文真形釜(市指定)	弘願寺																						○1	○3		○16	○1
素文真形釜	森田藤則																								○2		○2
素文甑口釜	森田藤則																										○3
薩菊松竹文釜	森田藤則																										○4
霰文真形釜	笠輪又左衛門																						○2				
霰文真形釜	上戸専光寺																						○3				
霰文真形釜	為国藤左衛門																						○4				
松竹莖草文真形釜	山本徳雄																						○5				
松竹梅文真形釜	西野喜一																						○6				
亀甲菱形草花肩霰真形釜	猪飼全邦																						○7				
菊文真形釜	青木敬一																						○8				
立菱紋霰文福茶釜	弘願寺旧蔵																						○9				
菊紋文福茶釜	誠照寺																						○10				
菊桐文肩衝釜	漆原圭三																						○12				
新羅系三足釜																								○1	○7		
新羅系三足釜																								○2	○8		
素文甑口釜																								○4			
梅文真形釜																								○5			
文様肌丸肩三足釜																								○7			
素文面取三足釜																								○8			
莖草文甑口三足釜																								○9			
菊牡丹文一文字羽真形釜																								○10			
松岡作文福茶釜																								○12			
能登中居作文福釜																								×11			
芦屋系三足釜																									○3		
芦屋系三足釜																									○4		
芦屋系三足釜																									○5		
芦屋系三足釜																									○6		

釜分類整理表

1．釜形状の輪口・立口は甑口とした。
2．表中の文字は下記の頭文字を取った。

形状：平釜　文福　尾垂　肩衝　繰口　面取　羽釜
鐔付：常張　仕付　獅子　羽：一文字　鎧羽　打欠
底　：平底　丸底　織部底　足：三足

釜の形状					鐔付			羽					底			他
真形	甑口	他	有	蜘蛛	面取	他	一文字	鎧	打欠	三ヒレ	形	足	織部		
	○	平	○		○				△	○			○		
				○				○							大西浄雪極め（香取説）
		○	尾	○	○					○				○	今泉也軒極め（名蔵目録は芦屋極め）
		○	文				常			○		三			島根県大社町在住
○				○		○			○						
		○		○		○				○					
		○	尾	○		○			○					○	
○				○	○			○							
○				○		松			○						
	○			○	○					○				○	敦賀
○				○	○			○							
		平				○	○							○	
		○	羽			○		○						○	
○				○		○				○				○	
○				○	○			○						○	
○				○	○			○							
○				○	○			○							
		平	○			仕	○								
○			尾	○		○								○	
○				○	○			○							
○				○	○			○							
○				○		○		○							
		○	羽	○		○	○								
			尾	○			桐			○				○	香炉釜（今立町在住）
○				○			竹		○						
○				○			猿			○					
		○		○		○					○				
		○	肩	○	○						○	平			武生市在住
○				○	○				○					○	
○				○	○					○					
		○		○		○					○				
○				○		○				○					
○				○	○				○						
○				○	○				○						
○				○	○				○						
○				○	○					○					
○				○	○				○						
			羽				兎		○						大西浄雪極め（長野説）
○				○		○			○						
			平			○				○					
			平	○		○		○						○	
○				○		○			○						
○				○		○			○						
			繰	○		○		△		○				○	
			平	○		○		○							
		○		○		○				○				○	敦賀
		○		○		○				○					敦賀
○				○	○			○							敦賀か
○				○			松	○							
○				○		○		○							敦賀
○			尾	○	○									○	敦賀
		○		○		○				○					
		○		○		○				○					
			平			○		○							
		○	尾	○		○								○	
		○		○		○								○	
		○		○			獅							○	
		○		○			常			○	織	三			
		○		○			常			○	織	三			
	○				○			○							
			肩	○	○						○	織			上真栢字徳間出土寄贈品
○				○	○						○			○	鯖江市在住
		○		○		○				○					
○				○	○				○			丸			室町期
		○			○				○			丸			
○				○	○				○			織			
○					○				○			織			桃山期
		○				○	○								一文字湯口
○				○	○		○					丸			
○				○	○				○			丸			今立町八石出土釜
○				○	○					○		丸			
○				○	○			○				丸			
○				○	○				○			丸			
○				○	○				○			織			
○				○		○	○					織			
○				○	○			○				丸			
			文	○	○				○			織	三		
			文	○			獅		○			織	三		青銅
○			肩	○	○						○	織	三		
		○				常				○			三		南北朝期
		○				常				○			三		江戸初期
		○			○		○					平			
○				○	○		○					織			
			丸	○		常	○					織	三		
			面			常				○	織	三			
		○	丸	○		常				○	織	三			
○				○		○	○					織	三		
○				○		獅	○					織	三		
○				○		獅	○					織	三		
		○				常				○			三		桃山～江戸期
		○		○		常				○			三		江戸期
		○				常				○			三		江戸期
		○		○		常				○			三		江戸期

参考文献一覧表

釜　関　係

書　籍　名	文　献　名	著　者	発行年月	出　版　社
万宝全書	炉釜之部－古今和漢諸道具見知抄		元禄７年	
茶家酔古集	釜之図		嘉永５年	
茶道筌蹄	釜作者の部・釜形之辨	稲　垣　休　叟	文化13年	
釜形写絵図		木　津　三　辰	大正15年12月	東谷龍堂
新撰茶之湯釜図録		香　取　秀　真	昭和８年12月	宝雲舎
茶道全集　器物編２	茶釜の歴史	香　取　秀　真	昭和11年５月	創元社
続金工史談	茶の湯釜のこと	香　取　秀　真	昭和18年６月	桜書房
茶の湯釜図録		名　越　昌　利	昭和２年	
茶の湯釜		瀬　川　昌　耆	昭和６年３月	宝雲舎
茶湯釜		髙　津　　満	昭和14年12月	便利堂
釜の研究		木　下　桂　風	昭和12年７月	雄山閣
釜－歴史と鑑賞		木　下　桂　風	昭和28年６月	白水社
茶の湯釜研究		加　藤　逸　庵		京都美術青年会
茶道文庫	釜	加　藤　逸　庵	昭和13年９月	河原書店
新修茶道全集	釜の作行	大西　清右衛門	昭和26年12月	創元社
あしやの釜		長　野　垤　志	昭和28年５月	便利堂
天命の釜		長　野　垤　志	昭和29年11月	便利堂
あしや系の釜		長　野　垤　志	昭和32年11月	便利堂
茶之湯の釜		長　野　垤　志	昭和41年９月	熱海商事
茶之湯名釜図録		長　野　垤　志	昭和45年６月	大塚工芸社
茶之湯釜名品図録		長　野　垤　志	昭和50年９月	大塚工芸社
茶之湯釜全集	越前・伊勢	長　野　垤　志	昭和48年９月	駸々堂
人間国宝シリーズ　27	長野垤志　茶の湯釜		昭和55年２月	講談社
茶の湯釜入門		細　見　古　香　庵	昭和41年９月	浪速社
釜　茶の湯釜の研究		細　見　古　香　庵	昭和45年１月	浪速社
茶の湯釜		細　見　古　香　庵	昭和49年８月	雄山閣
名釜と茶器			昭和45年10月	石川県美術館
国華　64－11，64－12	芦屋釜私考（上下）	保　坂　三　郎	昭和30年11.12月	朝日新聞社
茶道美術全集　10	釜	蔵　田　　蔵	昭和45年８月	淡交社
日本の美術　No. 89	茶湯釜	鈴　木　友　也	昭和48年10月	至文堂
釜師　茶の湯釜のできるまで		角　谷　一　圭	昭和49年３月	ナニワ社
雲州蔵帳図鑑		白　崎　秀　雄	昭和50年月	歴史図書社
茶釜の旅		前　田　泰　次	昭和54年11月	芸艸堂
茶の湯釜		根　来　茂　昌	昭和55年５月	理工学社
細見コレクション	釜と掛物	原　田　一　敏	平成９年10月	茶道資料館（京都）
茶道具の世界　8	釜　炭道具	長　野　　裕	平成12年６月	淡交社
日本の美術　No. 411	茶湯釜　芦屋と天命	原　田　一　敏	平成12年８月	至文堂
茶器・釜展　出品目録			昭和42年９月	岡島美術館
芦屋釜名品展			昭和54年４月	岡島美術館
越前文化　第４号	越前釜私考	森　田　藤　則	昭和46年２月	越前文化の会
越前文化　第６号	越前釜（一）	森　田　藤　則	昭和47年５月	越前文化の会
越前文化　第７号	越前釜（二）	森　田　藤　則	昭和47年６月	越前文化の会
白山比咩神社蔵の銅茶釜の鋳造年代		森　田　藤　則	昭和47年６月	越前文化の会
武生市史民俗編	五分市鋳物師と越前茶釜	森　田　藤　則	昭和49年３月	武生市
たけふの工芸展			昭和60年10月	武生市
芦屋釜展			平成３年８月	福岡県芦屋町
芦屋釜の図録			平成７年10月	福岡県芦屋町
芦屋町文化財調査報告書第７集	筑前金屋遺跡		平成８年３月	福岡県芦屋町

鋳物師関係

新保家鋳物業略歴調査報告書		新　保　佐治平	昭和19年７月	武生鋳工所
若越文芸	鋳物師聚落	杉　本　　寿	昭和24年７月	
農林経済学研第11輯	鋳物師聚落の研究	杉　本　　寿	昭和24年	福井大学
福井県丹生郡常盤郷土誌	金谷鋳物師集落の研究	国　兼　　栄	昭和32年９月	
ゆきのした通巻127号	たたらのうた		昭和43年６月	ゆきのした文芸会
福井県鋳物史誌		藤　本　留　男	昭和44年10月	
越前文化　第２号	五分市鋳物師関係史料	坪　谷　元三郎	昭和45年７月	越前文化の会
越前文化　第４号	五分市鋳物師関係史料（二）	坪　谷　元三郎	昭和46年２月	越前文化の会
東京国立博物館紀要第７号	由緒鋳物師人名録	村　内　政　雄	昭和47年３月	
若越郷土研究　23－１	五分市鋳物師考（一）	森　田　藤　則	昭和51年１月	
南条町誌	鋳物師・牧谷		昭和51年３月	南条町
松岡町史　上巻	芝原の鋳物師	野　村　英　一	昭和53年３月	松岡町
鋳物師集落史		池　田　錦　七	昭和53年秋	敦賀市鋳物師町
ふるさと味真野		斉　藤　槻　堂	昭和54年３月	
鋳物師史稿		五歩一　敬　治	昭和57年11月	
中世鋳物師史料		名　古　屋　大　学	昭和58年９月	法政大学出版部
敦賀市史　通史編　上巻	敦賀鋳物師と河瀬甚右衛門		昭和60年６月	敦賀市
福井県史　資料編２　中世	松村文書		昭和61年３月	福井県
近世鋳物師社会の構造		中　川　弘　泰	昭和61年４月	近藤出版社

鉱山製鉄資料関係

日本鉱業史要		西　尾　銈次郎	昭和18年８月	十一組出版部
鉱山の歴史		小　葉　田　淳	昭和31年７月	至文堂
日本古代の銅鉄の精錬遺跡に関する研究		石　川　恒太郎	昭和34年９月	角川書店
明治前日本鉱業技術発達史		日　本　学　士　院	昭和57年12月	臨川書店
日本製鉄史論集		たたら研究会	昭和58年12月	
考古学と自然科学　第20号	鉄滓の成分分析からみた我国古代製鉄技術	髙塚秀治・桂敬	昭和63年３月	同朋舎出版
和鋼博物館総合案内		和　鋼　博　物　館	平成13年５月	和鋼博物館
福井県鉱物誌		市　川　新　松	昭和８年９月	
福井県南条郡誌	処誌　北杣山村　産業　鉱業		昭和９年５月	
三井金属修史論叢　第５・６号	越前堀名銀山について　上・下	小　葉　田　淳	昭和46年4,11月	三井金属鉱業
日本鉱山史の研究		小　葉　田　淳	昭和43年５月	岩波書店
続　日本鉱山史の研究		小　葉　田　淳	昭和61年12月	岩波書店
昭和45年度研究報告71－３	飛騨変成岩とその経済的価値	大　木　謙　一	昭和46年３月	金経済大経済開発研
昭和47年度研究報告	北陸古代製鉄史に関する調査研究	吉　岡　金　一	昭和48年３月	金経済大経済開発研
	福井県金津町採取古代製鉄関連遺物の金属学的調査	大　澤　正　巳	昭和61年３月	
	北陸における古代鉄生産	関　　清　他	昭和64年３月	
若越の地学	福井県北部三国町福良海岸の更新世砂鉄層の紹介	安　野　敏　勝	昭和48年３月	
福井県金津地方の製鉄趾群		福井考古学研究会	昭和46年５月	
若越郷土研究16－３	古越前製鉄窯の研究	早　瀬　良　規	昭和46年５月	
若越郷土研究17－３	古代製鉄窯の技術的研究	早　瀬　良　規	昭和47年５月	
古代製鉄史の概要（レジメ）		早　瀬　良　規	平成３年10月	金津町中央公民館
細呂木遺跡	２号地点１・２号製鉄炉発掘調査報		昭和47年３月	福井県教育委員会
金津町埋蔵文化財調査概要	笹岡向山製鉄遺跡		平成７年３月	金津町教育委員会
古代の製鉄遺跡		坂　本　浩太郎	平成11年11月	加越たたら研究会

関連資料

越前鎌		西　井　俊　蔵	昭和17年10月	新農林出版
槌の響　越前武生の打刀物		斉　藤　嘉　造	昭和61年３月	
松岡の鋳物　１			昭和42年３月	松岡町
越前文化　第５号	南越の鰐口資料（一）	森　田　藤　則	昭和46年６月	越前文化の会
マンガン過剰水田に関する研究		寺　島　利　夫	昭和48年３月	
芦屋町文化財調査報告書第５集	山鹿田屋遺跡		平成６年３月	福岡県芦屋町
芦屋町文化財調査報告書第10集	金台寺過去帳		平成12年３月	福岡県芦屋町
時宗末寺帳		大　橋　俊　雄	昭和40年４月	清浄光寺内教学研
時宗過去帳		大　橋　俊　雄	昭和39年６月	清浄光寺内教学研
国立歴史民俗博物館研究報告77	越前における法華信仰の展開	古　川　元　也	平成11年３月	国立歴史民俗博物館